「かりんの家　親と暮らせない子どもたち」を見て

児童福祉施設は各種あるが、殆どは入所の子どもたちは多人数で、スタッフは交代勤務・変則勤務制でお世話する大舎制であり、どうしても子どもたちは集団生活を強いられがちで、個々の想いにはスタッフもなかなか対応し切れないのが現実である。

虐待、育児放棄、育児困難等の事情で親元で過ごせない子どもたちの児童養護施設も例外ではなく、子どもたちは成長段階だけに「オ母サン（HP「雑学 BN」の覚え書関係（Ⅱ）、2007.11.06.「オ母サンのもつ機能、心の居場所、しつけ（覚え書）」：参照）」をより強く求める。

その子どもたちの願いに応じるために、子どもは小人数で同じスタッフと寝食を共にし家族的な雰囲気の中でお世話する小舎制が理想として望まれる。

だが、実践にはスタッフの勤務形態、勤務時間等の側面等からも多くのハードルがあるのが現実…。

それだけに、先日のドキュメンタリー番組「かりんの家　親と暮らせない子どもたち」を見て、実践に取り組む法人の理念、また、その実践に取り組むスタッフの姿を知り、感服した。

「かりんの家」は、９年前に誕生した全国初の地域小規模児童養護施設で、幼児から高校生までの６人の子どもたちを３人のスタッフが地域の民家で暮らしている。

一つ屋根の下で、食事、入浴、洗濯、買い物等々を含め、正に家族として日常の生活を共に過ごしていた。

スタッフは住み込みで、時に入浴も共にし、時に添い寝し、時にアイロンがけしながら子どもとの会話、等々。　スタッフを実の親と思っている幼児、思春期の心の葛藤をスタッフにぶつける中学生、スタッフのような保育士になりたいという高校生等々に係わり合うスタッフの姿に、子どもたちが求めている「オ母サン」の存在を見た。

それにしても、スタッフは昼夜を問わず日常生活を共に過ごしながらプロとて係わり合うことを意識し続けなくてはならず、まずその勇気と精神力に感嘆・感服し、次のマーガレット・ミード（人類学者）の言葉を思い出す。

「思い遣りがあり、行動力のある人々は、たとえ少人数でも世界を変えられる。

それを決して疑ってはなりません。

実際、それだけがこれまで世界を変えてきたのですから。」

「かりんの家」の少人数のスタッフの思い遣りと行動力が、児童養護問題の世界を変えていくキッカケになることを願っている。

阿部幸泰　　（2010 年 2 月 18 日　記）